

対人的志向性尺度作成の試み*

斎藤 和志¹⁾ 中村 雅彦²⁾

I. 問 題

対人場面における行動の決定過程はさまざまな要因によって影響される。実験的な相互依存関係、特に実験ゲームなどの諸研究からその要因が明らかにされてきた。それらの要因を Rubin & Brown (1975) は3つの概念でまとめている。動機的志向性 (Motivational Orientation: 以下MOと略す)、勢力 (Power)、対人的志向性 (Interpersonal Orientation: 以下IOと略す) である。

Power とは、当該関係における勢力の分布に関する概念で、対等か非対等ということである。これは二者の地位や利得構造などを操作することによって検討されてきた (Rubin & Brown, 1975)。

MOとしては協同的、個人主義的、競争的な3つが基本的なものとして考えられてきた (Deutsch, 1960 など)。多くの実験は教示によってその方向を操作し、ゲーム行動との関連をみている。協同的動機づけとは、相手 (二者関係における他者) の利得にも関心を向け、協力して得点を増やすようにと教示される。個人主義的動機づけでは、自分の利得にのみ関心を向けるよう教示を行い、相手の利得には言及しない。競争的動機づけは、自分の得点を増やすと同時に相手に勝たなければならぬと教示することによって行われてきた。

Rubin & Brown (1975) が指摘したもう1つの重要な概念はIOである。彼らはゲーム行動に影響を及ぼす個人の背景変数 (年齢、性など) やパーソナリティ変数 (権威主義、マキャベリアニズムなど) といった個人差要因を統合する概念としてIOを捉えている。IOは相互依存関係の対人的側面に対して敏感であるかどうかという連続変数である。彼らによれば、IOの高い人と

低い人の特徴は次のようである。

① 高対人的志向性の特徴 IOの高い人は他者との関係の対人的側面に敏感に反応し、他者の行動の多様性に関心をもち反応する。そのような多様性はIOの高い人に、他者の好むことや期待すること、他者の行動の意図、他者が本当はどういう人物かといった他者に関する重要な情報を提供する。こうしたことのひとつの結果として、他者の行動の多様性における結果を、両者のかかわっている特定の状況よりも他者のパーソナリティに帰属する傾向がある。すなわち、IOの高い人は他者の行動を過度に個人的なものとして受け取るのである。このような人は他者の協同性や競争性、勢力の分布、関係における依存性に敏感であり、反応する。それ故、高IOの人は衡平、交換、返報といった規範からの他者の逸脱の程度に注意を払う。他者と関係するすべての側面が高IOの人にとって関心のある重要な事象なのである (Rubin & Brown, 1975, p.158)。

② 低対人的志向性の特徴 IOの低い人は他者との関係の対人的側面に敏感には反応しない。このような人は他者と協同的であるか競争的であるかに関心がなく、自分自身の利益の最大化に関心を払い、他者の本質をみいだすことに関心がない。IOの低い人にとって、他者は非人称的“機械”であり、自分と同じように推測し行動すると期待される合理的な人間である。他者の行動の多様性は、他者に固有な行動様式 (パーソナリティ) を反映したものというより、特定の環境状態を反映したものとみられがちである。したがって、IOの低い人は他者の行動の多様性の結果を他者のパーソナリティ要因よりは状況要因に帰属する傾向がある。このような人は関係を個人的なものとしては受け取らず、他者の協同性や競争性に対して協同的、競争的交渉というかたちでは反応しない。他者の行動や傾性とはかかわりなく、低IOの人の行動は自分自身にとっての有形無形の利益をできるだけ獲得するように計画されている (Rubin & Brown, 1975, Pp.159-160)。

以上のような観点に加えて、Rubin & Brown

* 本研究のためのデータ処理は、名古屋大学大型計算機センターのFACOM M-382によって行われた。

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程 (後期課程)

2) 愛媛大学教養学部講師

(1975)はI OをMOとの関連から検討している。すなわち、協同的、競争的MOは高I Oと対応し、個人主義的MOは低I Oと対応しているというのである。I Oの高い人の中には、協同的志向性をもつ人と競争的志向性をもつ人とが含まれ、また、他者の協同性、競争性に関心をもち反応するというのである。それに対して、I Oの低い人は個人主義的志向性をもち、協同性、競争性というよりは合理性に関心をもち反応するということである。

動機の方角性を個人差の問題としてみた研究はいくつかみられる。たとえば、Sawyer (1966)は利得と動機づけの方角の関連性を検討している。相手の利得に対するウェイト a (altruism) が1.0の場合を協同的、0.0の場合を個人主義的、-1.0の場合を競争的対人的方角づけとしている。同様の検討を中村 (1976)も行っている。また、Wyer (1969)も自分自身の利得と相手の利得に対するウェイトを考え、相互依存関係の帰結の効用を推定している。同じような観点から寺岡 (1979)は、利得対象が誰かを定める利得対象動機群 (利己、共性、利他) と利得変化の方角を決める利得変化動機群 (上昇、比較、下降) という概念の組合せから、規範的要求系モデルを考えている。

相手の行動が影響を及ぼすということは、実験ゲーム研究全般から得られている知見といえよう。土肥・岩渕 (1980)は相互依存関係における人間行動の一般理論を目指して、行動選択の内的過程の本質的な要素を捉えたモデルの模索を試みている。繰り返しのある実験ゲームにおける認知的要素として、結果の認知、相手の認知、場面の認知をあげている。それらを処理する過程として、社会的動機の方角 (OSM) 処理と被験者の選択に対する相手の反応性 (REA) 処理の2つを重視している。ここでのREA処理と対応するのがI Oだと考えることができよう。

実験ゲーム場面という限定的なものではなく、より一般的な対人場面における理論を展開しているものとして、Kelley & Thibaut (1978)の相互依存関係の理論があげられる。川名 (1985)はこの理論に基づいて対人的動機の数学的モデルを提案している。ここで重要なのは、自己の利得と他者の利得を認知して得られる所与利得行列 (given matrix) が具体的な対人的行動を決定する (予測する) 効果利得行列 (effective matrix) を生み出す変換過程 (transformation process) である。すなわち、動機づけの方角性は変換過程の枠組みの中で考えることができるということであろう。その変換過程に関連する対人認知の次元として考えられる“相互依存の程度” (Kelley, 1983) がI Oと密接に関係していると考えられる。

このように、Rubin & Brown (1975)が実験的研究の知見から導出したI Oという概念は、単に実験ゲームにのみ適用されるものではなく、相互依存関係における対人行動にもかかわってくるものといえる。動機的な方角性を協同的、個人主義的、競争的といった3カテゴリーに分割することなく、また、協同的-個人主義的-競争的といった一次的な捉え方ではなく、相互依存関係におけるさまざまな対人行動を理解、予測することが可能になると考えられる。Swap & Rubin (1983)はこうした概念定義に基づき、対人的志向性尺度 (IOS) を作成している。本研究は、このI O尺度を邦訳するところから始め、その信頼性、妥当性を検討する。そして、より洗練されたかたちでのI O尺度を作成することを目的とする。

II. 翻訳版対人的志向性尺度の作成

1 目的

Swap & Rubin (1983)が作成したI O尺度29項目を日本語に訳し、その妥当性及び信頼性を検討する。彼らによれば、I O尺度は、(a)自分自身に直接影響を及ぼすような他者の行動に対する反応性、(b)他者がどんな人物であるかに関する関心、(c)社交性などに関するその他の項目、といった3領域からなっている。また、彼らは、その妥当性を検討するためにいくつかのパーソナリティ・テストと面接を実施している。彼らの用いたパーソナリティ尺度はセルフ・モニタリング尺度、ドグマティズム尺度、マキャベリアニズム尺度、場依存性尺度、統制の座に関する尺度であった。ここでは、その中からセルフ・モニタリング尺度とマキャベリアニズム尺度の2つを用いて行う。

2 方法

(1) IOSの作成

Swap & Rubin (1983)の29項目を日本語に訳した。翻訳に際しては、項目の意味が変わらないよう、なるべく自然な表現になるよう配慮した。ただし、項目29の“telephone operators”という単語があまり一般的でないと判断し、内容を変えた (表1参照)。各項目は「まったくそう思わない」 (= 1点) から「まったくそう思う」 (= 5点) までの5段階評定とした。これをIOS-Iと呼ぶ。このIOS-Iを、277名の大学生 (男子131名、女子146名) に対して実施した。

(2) 調査用紙の構成

IOS-Iの実施と同時に次の2つの尺度を妥当性吟味のために行った。

- ① セルフ・モニタリング尺度 セルフ・モニタリング

とは、状況や他者の行動に基づいて自己の表出行動や自己提示が社会的に適切かどうかを観察し自己の行動を統制する傾向の個人差にかかわる概念である (Snyder, 1974)。Snyder (1974) は25項目からなる真偽法による尺度を作成しているが、本研究ではIOS同様に5段階評定とした。具体的な項目は岩渕・田中・中里 (1982) によった。

② マキャベリアニズム尺度 この Christie & Geis (1970) のマキャベリアニズム尺度は、目的達成のためには冷淡な手段を取ることも辞さず、冷静で理知的であり、理想よりも現実の利益を重視する傾向を測ると考えられている。Christie & Geis (1970) はいくつかの尺度を考案しているが、本研究ではリッカート型尺度の20項目からなるMach IVを用いた。本来は7段階評定であるが、この尺度も5段階評定とした。具体的な項目は中村 (1983) によった。

3 結果と考察

IOS-Iの各項目の平均 (M), 標準偏差 (SD), を表1に示した。29項目の合計得点の平均は99.9, 標準偏差は10.4であった。また, α 係数は.68とやや低い値であった。表1のR1は29項目の場合の当該項目を除いた合計得点との相関係数である。いくつかの項目は内容的にみても妥当とはいえないものがあると考えられた。また, 因子分析の結果も明瞭とはいえなかった。主因子法, バリマックス回転による因子分析を行った結果, 固有値の推移及び因子の解釈可能性を考慮し, 3因子を抽出した。しかしながら, その3因子による説明率は26.7%と低く, 因子負荷が.30に満たない項目が29項目中10項目もあった。

これらの分析から, 項目2, 5, 6, 8, 10, 11, 13, 17, 22の9項目を除外した。表1のR2は20項目の場合の当該項目を除いた合計得点との相関係数である。その結果, 平均は72.9, 標準偏差は9.4, α 係数は.75となった。因子分析の結果, 全分散の33.9%を説明する3因子を抽出した。しかし, 因子負荷が.30に満たない項目は20項目中6項目あった。第I因子に高い負荷を示した項目は“人からの批判がとても気になる”, “ほほ笑みかけたりいやな顔をする人が非常に気にかかる”, “面識のない人と電話で話す時, その人がどんな人物か気になる”といった項目であり“対人的関心”因子と解釈された。第II因子は“人が自分について打ち明ければ打ち明けるほど, 私も打ち明けるようになる”, “人が私的なことを打ち明けてくれた時, 私はその人と親密になった気がする”といった項目に高い負荷を示し, “自己開示傾向”因子と解釈された。第III因子に高い負荷を示したのは

“必ずしも恩に恩で報いる必要はない”, “誰かに親切にされた時, 必ずしもそのお返しをする必要はないと思う”といった項目であり“返報性傾向”の因子と解釈された。この20項目からなるIO尺度をIOS-IIと呼ぶ。

20項目の場合をみると, セルフ・モニタリング尺度との間に.24, マキャベリアニズム尺度との間に-.23の有意な相関がみいだされた。Swap & Rubin (1983) は, セルフ・モニタリングの概念がIOの概念と部分的に重複すると考えており, 正の相関をみだしている。そして, マキャベリアニズムに関しては, Rubin & Brown (1975) ではマキャベリアニズム傾向 (マック傾向) の“人の上に立つ”という特徴が強調され, 競争的高IOとマック傾向の関連が示唆されている。しかし, “目的達成のためには冷淡な手段を取る”や“冷静で理知的であり, 理想よりも現実の利益を重視する”といった特徴を考えると, マック傾向は低IOと関連すると思われる方が妥当であろう。Swap & Rubin (1983) もこのように考え, 負の相関を仮定し, そのような結果を得ている。したがって, ここでの結果はIOS-IIの妥当性を裏付けるもとと考えられた。

IOS-IIを用いた実験 (実験ゲーム) については斎藤・中村 (1985), 斎藤 (1985) を参照されたい。これらの実験において, 約12週間の間隔でIOS-IIを再実施したところ.55から.79の有意な相関がみられた。しかしながら, 318名の大学生 (男性230名, 女性88名) に対して実施した結果は, 平均71.0, 標準偏差7.2, α 係数.68であった。IOS-IIに関しては, 一応の成果は得られたものの, 信頼性, 妥当性に関して更に検討していく必要性が認められた。

III. 改訂版対人的志向性尺度の作成

1 目的

Swap & Ruin (1983) のIO尺度を翻訳したIOS-IIは, 信頼性, 特に内的整合性の点でやや問題をもっていると考えられる。また, 因子分析の結果でも, 因子化しない雑多な項目が多く含まれていることが明らかにされた。いずれにしても, IOS-IIをそのままのかたちで利用することは大きな問題が生じることになる。したがって, この尺度に大幅な改良を加え, 信頼性, 妥当性を向上させる必要があろう。そこで, 独自の項目を加えて新たにIO尺度を作成し, その信頼性と妥当性を吟味することにした。

対人的志向性尺度作成の試み

表1 IOS-Iの項目別平均, 標準偏差

Items	M	SD	R 1 ^a	R 2 ^b
1. 個人的な悩み事がある時, 人と話し合うよりも自分自身で考えるほうである。 ^c	2.62	1.17	.21 ***	.22 ***
2. 自分を寛大な人間だと思う。	2.75	1.21	-.10	—
3. 人は私を大いに喜ばせたり苦しめたりする存在である。	3.31	1.27	.16 **	.16 **
4. どうして人がそうしたのかを知ることに関心がある。	3.56	1.14	.29 ***	.33 ***
5. 贈りものをもらった時, それがいくらぐらいするのかを気にする。 ^c	2.88	1.23	-.14 *	—
6. 盗品と疑わしいものを買ったりするようなことはない。	3.86	1.28	.08	—
7. 一緒にいる人の気分に非常に影響される。	3.61	1.25	.37 ***	.40 ***
8. 真実を隠すことは時として思いやりのあることだ。	3.99	1.02	.04	—
9. たとえ誰に聞こえようと, 時には困っていることについて声を出してみると気分がよい。	3.13	1.25	.21 ***	.23 ***
10. 私と友達と同じ音楽の興味を持っているように思う。	2.74	1.19	.13 *	—
11. よく知らない人に私生活について話すのをためらう。 ^c	2.86	1.27	.02	—
12. 人が本当はどんな人物であるかにあまり関心がない。 ^c	3.97	1.05	.26 ***	.30 ***
13. 人が自分に言うことをあまりに私的なこととしてうけとめることがある。	3.03	0.99	.03	—
14. たとえうだつがあがらないにしても, 私にとってはうまくやっ ていける人と一緒に働くことが重要である。	3.80	1.03	.15 *	.18 **
15. 指導教官(担任の先生)がどんな人であるか気になることがよくある。	3.22	1.34	.26 ***	.29 ***
16. 誰かとアパートと一緒に住むとしたら, その人の家庭環境や趣味などを知っておきたい。	4.18	1.10	.30 ***	.32 ***
17. 先生が採点するテストで悪い成績をとるよりは, 機械で採点する テストで悪い成績をとる方がまだましだ。	2.64	1.27	.08	—
18. 容姿のよい人を好きになるきらいがある。	3.13	1.13	.20 ***	.18 **
19. 人が私の行為についてどのように考えているかということは重要でない。 ^c	4.03	1.04	.41 ***	.39 ***
20. 人が自分について打ち明ければ打ち明けるほど, 私も自分について 打ち明けるようになる。	4.08	1.02	.50 ***	.52 ***
21. 誰かに親切にされた時, 必ずしもそのお返しをする必要はない と思う。 ^c	3.92	1.10	.40 ***	.39 ***
22. バスや地下鉄に乗っている時, 隣の人が何をしている人かを想像 することがある。	2.25	1.27	.13 *	—
23. 人と一緒にいればいるほど, その人を好きになっていく。	3.23	0.99	.30 ***	.30 ***
24. 心のこもっていない高価な贈りものよりも, 安くても心のこも った贈りものをもらった方がよい。	4.37	0.90	.14 *	.13 *
25. 人からの批判がとても気になる。	4.12	1.01	.45 ***	.48 ***
26. 人が私的なことを打ち明けてくれた時, 私はその人と親密にな った気がする。	4.08	0.95	.43 ***	.48 ***
27. 必ずしも恩に恩で報いる必要はない。 ^c	3.53	1.16	.38 ***	.36 ***
28. ほほ笑みかけたりいやな顔をする人が非常に気にかかる。	3.70	1.04	.35 ***	.34 ***
29. 面識のない人と電話で話す時, その人がどんな人物か気になる。	3.33	1.30	.35 ***	.35 ***
(29項目) M = 99.92, SD = 10.43, $\alpha = 0.68$ (20項目) M = 72.92, SD = 9.36, $\alpha = 0.75$				

a) R1は29項目の場合の当該項目と当該項目を除いた合計得点との相関係数を示す。

b) R2は20項目の場合の当該項目と当該項目を除いた合計得点との相関係数を示す。

c) 逆転項目を示す。

注1) 有意水準 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ 。

2 方法

(1) 新尺度項目の精練

まず、IOS-IIの因子分析の結果を参考に、対人的な応答性及び対人的な感性に関係のある項目のみを抜粋した。これらの側面はIO概念の中核をなす要素であると考えられるためである。次に、Rubin & Brown (1975)の中に記述されている典型的な高IO者と典型的な低IO者の行動特徴に基づいて、新たな項目を考案した。こうして集められた項目は、最終的に60項目に及んだ。この尺度をIOS-IIIと呼ぶ。94名の大学生に対して、IOS-IIIを実施した。得られた資料について因子分析及び項目分析を行い、周辺的な項目を除去した。その結果、比較的均質な項目が20項目残った。この尺度をIOS-IVと呼ぶ。

次により大きなサンプルについて、項目内容の均質性を再確認しようと試みた。すなわち、185名の大学生（男性94名、女性91名）に対して、IOS-IVを実施した。得られた資料に基づいて、因子分析及び項目分析を行った。その結果、周辺的な項目がさらに2項目除去された。こうして最終的に残った18項目からなる尺度をIOS-Vと呼ぶ。

(2) IOS-Vの実施手続き

374名の大学生（男性128名、女性246名）に対して、IOS-Vを実施した。回答形式は5段階評定とした（まったくそう思わない＝1点から、まったくそう思う＝5点まで）。また、IO尺度と他のパーソナリティ尺度との関連性をみるために、以下の尺度を同時に実施した。

- ① セルフ・モニタリング尺度 翻訳版実施時に同じ。
- ② マキャベリアニズム尺度 翻訳版実施時に同じ。
- ③ EPPS性格検査 本研究では主要な社会的動機との関連をみるため、Edwards (1953) が作成したEPPSのうち、達成動機、親和動機、支配動機を測定する下位尺度を各9項目抜粋した。そして回答形式を5段階評定に変更して実施した。
- ④ モーゼレイ性格検査E尺度 社会的向性との関連をみるために Eysenck (1959) の作成したMPIのE尺度を実施した。これは24項目からなっており、3件法で回答する形式をとっている。
- ⑤ 権威主義的性格尺度 藤沢・浜田 (1961) の作成した日本語版F尺度のうち、権威主義的服従性と権威主義的攻撃性に関する15項目を抜粋して用いた。それぞれ5段階評定で回答を求めた。

なお、これらの尺度を回答者に呈示するときの順序は3通りに変化させて、回答に歪曲が生じないように配慮した。

3 結果と考察

(1) 因子分析の結果

得られた資料に対して、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。固有値の推移及び因子の解釈可能性を考慮した結果、3因子を抽出した（表2）。

第I因子には、“日頃から人間関係を大事にしている”、“人付き合いがよい方だと思う”、“人から個人的な話をもちかけられるのは煩わしいものだ”といった項目が高い負荷を示していた。そこでこの因子は“人間関係志向性”を反映する因子として解釈された。第II因子には、“人からの批判が気になる”、“微笑みかけたり嫌な顔をする人が気になる”、“人が私の行為についてどのように考えているかということは重要でない”といった項目が高い負荷を与えている。そこでこの因子は“対人的関心・反応性”を表す因子として解釈された。第III因子には、“自分は自分、他人は他人と割りきって物事を考える方である”、“人のことには構わず、マイペースで行動する方である”といった項目が高い負荷を示していた。この因子は“個人主義傾向”を反映する因子として解釈された。

以上の結果から、IOS-Vは3つの下位尺度から構成されていると考えられた。このうち直接IOの概念と結び付くのが対人的関心・反応性の下位尺度である。以後の分析では、全体尺度のみならず、下位尺度毎の検討も加えることにした。

(2) 項目分析の結果

全サンプルの全体尺度得点の中央値を求めたところ、67.1であった。この得点を基準値として、上位群（178名）と下位群（196名）を構成し、各項目の得点について要因の分散分析を行った。その結果すべての項目において、0.1%水準で有意差がみいだされた（表2）。すなわち、すべての項目において上位群は下位群に比べて有意に高い得点を示した。

また、各項目の得点と当該項目を除いた合計得点との相関係数を算出した。その結果すべての組合せについて、有意な正の相関がみいだされた（表2）。

以上の結果より、IOS-Vの項目は高い弁別性をもっているといえよう。

(3) IOS-Vの内的整合性

IOS-Vの内的整合性を検討するために、 α 係数を算出した。その結果、全体尺度では.80、人間関係志向性では.77、対人的関心・反応性では.70、個人主義傾向では.65となった（表3）。以上の結果から、少なくとも全体尺度の内的整合性は高く、均質な項目から構成されているといえよう。

表2 IOS-Vの因子分析及び項目分析の結果

Items	Factors				Discrimination	
	Factor I	Factor II	Factor III	h^2	F ratio ^a	r^b
I 人間関係志向性						
15. 日頃から人間関係を大事にしている。	.630	.080	.206	.446	93.81	.56
9. 人付き合いがよい方だと思う。	.598	.045	.142	.380	57.87	.43
18. 人から個人的な話をもちかけられるのは煩わしいものだ。 ^c	.580	.134	-.087	.362	65.67	.40
17. 自分にとって人間関係は煩わしいものである。 ^c	.535	-.041	-.061	.292	38.54	.28
13. 同じゲームをやるなら、一人でできるものよりも相手がいてできるものの方がよい。	.449	-.058	.174	.235	48.35	.31
11. 出会った人とは、できるだけ親密になろうと努力する。 ^c	.433	.118	.249	.263	82.87	.42
2. 他人事でも、一喜一憂することが多い。	.411	.245	.173	.259	68.73	.45
4. 他人の感情や気持ちを考えることは意味がない。 ^c	.352	.290	.065	.212	41.42	.40
8. 仕事上の付き合いでは、個人的に親しくなることは重要ではない。 ^c	.300	.177	.201	.162	59.73	.37
II 对人的関心・反応性						
6. 人からの批判が気になる。	-.113	.654	.170	.469	38.38	.30
7. 微笑みかけたり嫌な顔をする人が気にかかる。	-.069	.641	.143	.436	25.42	.30
5. 人が私の行為についてどのように考えているかということは重要ではない。 ^c	.126	.513	.132	.296	53.91	.39
1. 他人の行動の動機を知ることに関心がある。	.131	.487	.003	.255	47.54	.31
3. 人が本当はどんな人物であるかに関心がない。 ^c	.293	.380	-.066	.235	40.02	.34
III 個人主義傾向						
10. 自分は自分、他人は他人と割り切って物事を考える方である。 ^c	.114	.173	.709	.546	60.55	.40
14. 人のことには構わずマイペースで行動する方である。 ^c	.090	.047	.662	.449	52.08	.30
12. あまり人のことには立ち入らない方である。 ^c	.292	.275	.354	.286	77.77	.47
重複項目						
16. 自分と関わりのある人については、なるべく色々なことを知りたいと思う。	.406	.411	.104	.345	91.11	.50
Σa²						
2.557 1.981 1.389 5.927 (total)						
分散 (%)						
14.206 11.006 7.717 32.929 (total)						

a) 尺度の全体得点の中央値を基準に上位群と下位群の当該項目における差を検定した結果を示す。

df = 1 / 372 で全ての項目について 0.1 % 水準で有意差がみられた。

b) 当該項目と当該項目を除く他の項目の合計得点との相関係数を示す。すべて 0.1 % 水準で有意であった。

c) 逆転項目を示す。

(4) 他のパーソナリティ尺度との関連性

IOS-Vの妥当性を検討するために、全体尺度及び3つの下位尺度とその他のパーソナリティ尺度との相関を算出した。表3には全体サンプルにおける結果を示し

た。また、表4には男女別サンプルにおける結果を示した。

まず、全体サンプルについてであるが、IOS-Vの全体尺度は、他の7つのパーソナリティ尺度といずれも

表3 IOS-Vと他のパーソナリティ尺度との相関(全体サンプル)

	(1) GIO	(2) F1	(3) F2	(4) F3	(5) Mach	(6) SMS	(7) MPI-E	(8) Ach	(9) Dom	(10) Aff	(11) Fas
(1) GIO (18 items)	(.80)	.87 ***	.72 ***	.62 ***	-.29 ***	.40 ***	.44 ***	.11 *	.25 ***	.65 ***	.22 ***
(2) F1 (10 items)		(.77)	.41 ***	.46 ***	-.38 ***	.40 ***	.58 ***	.16 **	.22 ***	.68 ***	.18 ***
(3) F2 (6 items)			(.70)	.21 ***	.01 n.s.	.23 ***	.07 n.s.	.13 *	.21 ***	.34 ***	.16 **
(4) F3 (3 items)				(.65)	-.24 ***	.22 ***	.21 ***	-.08 n.s.	.05 n.s.	.40 ***	.19 ***
(5) Mach					(.72)	.03 n.s.	-.24 ***	.04 n.s.	.03 n.s.	-.40 ***	-.11 *
(6) SMS						(.77)	.50 ***	.20 ***	.27 ***	.26 ***	.08 n.s.
(7) MPI-E							(.90)	.20 ***	.38 ***	.43 ***	.16 **
(8) Ach								(.70)	.47 ***	.19 ***	.04 n.s.
(9) Dom									(.78)	.18 **	.16 **
(10) Aff										(.79)	.21 ***
(11) Fas											(.77)

注1) () 内は α 係数を示す。注2) 有意差水準 * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$ 。

注3) 各尺度の略号は以下の通り。

GIO	10尺度の全体得点
F1	人間関係志向性
F2	対人的関心・反応性
F3	個人主義傾向(逆転して計算)
Mach	マキヤベリアニズム
SMS	セルフ・モニタリング
MPI-E	社会的向性
Ach	達成動機
Dom	支配動機
Aff	親和動機
Fas	権威主義的服従・攻撃性

表4 IOS-Vと他のパーソナリティ尺度との相関(男女別)

	(1) GIO	(2) F1	(3) F2	(4) F3	(5) Mach	(6) SMS	(7) MPI-E	(8) Ach	(9) Dom	(10) Aff	(11) Fas
(1) GIO (18 items)		.90***	.74***	.59***	-.28***	.50***	.48***	.13 n.s.	.36***	.71***	.12 n.s.
(2) F1 (10 items)	.85***		.46***	.49***	-.43***	.56***	.60***	.22 *	.33***	.74***	.11 n.s.
(3) F2 (6 items)	.69***	.35***		.16 n.s.	.02 n.s.	.20 *	.05 n.s.	.05 n.s.	.20 *	.43***	.10 n.s.
(4) F3 (3 items)	.64***	.43***	.22**		-.13 n.s.	.33***	.35***	.08 n.s.	.27**	.33***	.09 n.s.
(5) Mach	-.27***	-.32***	.04 n.s.	-.29***		-.10 n.s.	-.31***	.04 n.s.	-.08 n.s.	-.42***	.03 n.s.
(6) SMS	.32***	.28***	.24***	.14 *	.13 *		.58***	.28***	.27***	.49***	.05 n.s.
(7) MPI-E	.40***	.56***	.05 n.s.	.12 *	-.19**	.46***		.33***	.39***	.47***	.09 n.s.
(8) Ach	.21**	.21**	.26***	-.04 n.s.	.05 n.s.	.19**	.20**		.35***	.34***	.04 n.s.
(9) Dom	.24***	.21**	.28***	-.04 n.s.	.06 n.s.	.30***	.41***	.50***	.16*	.36***	.18*
(10) Aff	.56***	.61***	.19**	.42***	-.36***	.06 n.s.	.38***	.26***	.20**		.13
(11) Fas	.24***	.19**	.16*	.21**	-.16**	.08 n.s.	.18**	.13*		.18**	

注1) 右上の数値は男性サンプル(N=128), 左下の数値は女性サンプル(N=246)の相関係数を示す。

注2) 有意差水準 *p<.05, **p<.01, ***p<.001。

注3) 各尺度の略号は表3に同じ。

有意な相関を示している。特に、親和欲求尺度との相関が.65と高いことが目につく。それ以外の尺度との相関は低いが、中位の相関にとどまった。このことはIOS-Vが親和欲求と密接に関連する項目を多く含んでいることを意味する。ちなみに下位尺度別の相関をみると、人間関係志向性と親和欲求との相関が.68と高い。しかしながら、対人的関心・反応性や個人主義傾向との相関は、どちらの場合も中位(.34, .40)にとどまっており、これらの尺度が親和欲求とは相対的に独立した側面を査定していることがうかがわれる。

次に、男女別の尺度間相関の結果をみよう。全体尺度の相関パターンは基本的に男女間で一致している。しかしセルフ・モニタリングや親和欲求尺度との相関は、女性よりも男性において高くなる傾向がみられた。とりわけ、男性では親和欲求との相関が.71と非常に高くなっている。

以上の結果を考慮すれば、IOS-Vの全体尺度を用いる場合、親和欲求との弁別性に問題が生じる可能性がある。IOの概念が広義の社会性にかかわるものである以上、親和性概念とのある程度の重複が生じることは十分に考えられることである。そこでこの問題を解決するための1つの操作上の方法としては、IOS-Vの全体尺度ではなく、狭義のIO概念を反映している対人的関心・反応性の下位尺度を用いるというやり方があげられる。このことによって、親和欲求との弁別性を高めることができよう。

(5) IO尺度得点の性差

表5には、IOS-Vの平均値と標準偏差を示した。男性サンプルと女性サンプルとでIO尺度得点に差異があるかどうかを検討した。その結果、全体尺度得点並びに3つの下位尺度得点のすべてにおいて性差がみられた。これらの結果は、いずれも女性が男性に比べ、IO尺度得点が有意に高いことを意味するものであった。このような結果は、Swap & Rubin (1983) のIO尺度においてもみだされている。

(6) 要 約

これまでみてきたように、IOS-Vについて得られた結果は、翻訳版IO尺度に比べ高い内的整合性を示している。したがって、信頼性の点では向上がみられたといえよう。第二に、因子的妥当性の点では、対人的関心・反応性の因子がみだされたことにより、当初の概念定義に沿った項目から尺度が構成されていると考えられる。第三に、弁別性の点では、全体尺度と親和欲求との高い相関に問題がみられる。しかし、IO概念の中核的要素をなす対人的関心・反応性の下位尺度は他のパーソナリティ尺度とは相対的に独立した相関パターンを示してお

表5 IOS-Vの平均値と標準偏差及び性差の検定結果

尺度の種類	全体サンプル (N = 374)	男性サンプル (N = 128)	女性サンプル (N = 246)	性 差 F (1,372)
全体尺度得点 (18項目)	66.48 (7.87)	64.30 (9.21)	67.62 (7.07)	15.04***
人間関係志向性 (10項目)	38.11 (5.16)	36.98 (5.89)	38.70 (4.74)	9.34**
対人的関心・反応性 (6項目)	24.54 (3.39)	22.72 (3.90)	23.96 (3.09)	11.38**
個人主義傾向 (3項目)	9.79 (2.21)	9.41 (2.24)	10.00 (2.20)	5.98*

注1) () 内は標準偏差を示す。

注2) 有意差 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ 。

り、弁別性は高いといえよう。

IV. 対人的志向性が社会的行動に及ぼす影響

次に検討を要する課題はIOS-Vを用いて測定された“対人的志向性”がさまざまな社会的行動に及ぼす影響を及ぼすのかを確かめることである。先に述べたように、斎藤(1985)はIOS-IIを用いて、IOがゲーム行動に及ぼす効果を検討している。ここではIOS-Vを用いて、IOと密接な関連の予想される社会的行動としての自己開示と対人魅力、報酬分配場面における行動と認知的側面を検討する。

1 自己開示と対人魅力

従来の研究では、他者の行う自己開示の内面性が受け手の開示者に対する評価にどのような効果を及ぼすかということが問題とされてきた(中村, 1985b; 安藤, 1986)。ひとつには、開示事態の要因がかかわってくると考えられる。すなわち、内面的な開示が適切な役割関係(Chaikin & Derlega, 1974)適切なタイミング(Archer & Burleson, 1980)選ばれた受け手(中村, 1984)に対して行われるとき、開示者に対する評価は好意的なものとなる。

もうひとつの要因は、開示の受け手の個人差にかかわる変数である。自己開示が報酬機能をもちうるのは、受け手が他者に対する情報を求めており、彼/彼女のことに関心をもっている場合である。このことから、受け手のIOが開示者に対する評価に大きな影響を及ぼすと考えられる。すなわち、IOの高い受け手は他者に対する関心・反応性が高いため、自己開示を行う他者に好意的な評価反応が生じやすいであろうと予測される。この予

測を支持する知見として、Swap & Rubin (1983)は、高IOの受け手は、低IOの受け手に比べ、開示の内面性に関係なく、開示者に好意的態度を形成することを明らかにしている。

それでは“自己開示をしない他者”に対する評価は、受け手のIOによってどう異なるであろうか。対人的関心及び反応性の差異によって、高IOの受け手は、少なくとも自己開示を行う他者には好意的な態度が形成されるであろう。しかし、情報を隠蔽する他者または開示を拒否する他者は、高IOの受け手の要求を充足するのを妨げる罰的な存在である。したがって、そのような他者に対しては非好意的な態度が形成されるであろう。一方、低IOの受け手は、対人的な関心や反応性が低いため、開示者の自己開示パターンの違いによって、評価反応には変化が生じにくいであろう。

以上のような予測に基づいて、中村(1985a)は実験を行っている。IOS-Vの全体得点の中央値に基づいて、高IO群と低IO群に分けられた女性の被験者は、同性の大学生が書いたとされる自己開示メッセージを読んだ。その内容は、内面的なもの(内面的開示条件)または表面的なもの(表面的開示条件)からなっていた。加えて、表面的な情報を開示した後に一部の話題については情報提供を拒否する旨のメッセージ条件(隠蔽条件)が設定された。メッセージを読み終った後、被験者は刺激人物に対する好意度を評定した。

その結果、表面的開示条件及び内面的開示条件では高IOの被験者が低IOの被験者に比べ、刺激人物を好意的に評価していた。これに対し、隠蔽条件では高IOの被験者が低IOの被験者に比べ、刺激人物を非好意的に評価することがみいだされた。また高IOの被験者は開

示を拒否する刺激人物よりも、表面的にせよ内面的にせよ、自己開示を行う刺激人物の方を好意的に評価した。一方、低 I O の被験者は表面的な開示者よりも内面的な開示者を好むという結果が得られ、必ずしも開示パターンの影響を受けないわけではないことが示唆された。

以上の結果は、当初の予測をおおむね支持するものであったといえよう。

2 報酬分配場面における I O の効果

ある集団内における報酬の分配は、対人的葛藤や自己呈示とかかわる重要な社会的行動ということができよう。分配行動の公正性の基準として、衡平原理と平等原理の 2 つが特に重要であることは多くの研究者が認めている（奥田，1984）。衡平分配とは集団構成員の貢献度に比例して報酬を分配する方法であり、平等分配とは貢献度とは関係なく集団構成員が平等に報酬を分配する方法である。

I O と報酬分配行動に関して、Swap & Rubin（1983）は、高 I O は平等原理、低 I O は衡平原理に基づいて報酬を分配することをみだしている。またこの分配傾向には性差もみられた。すなわち、女性は平等分配を、男性は衡平分配を行っていたのである。また、Major & Adams（1983）は、I O 差よりも性差の方が強いことをみだしたが、分配の方法が個別的か公的かによって異なるとしている。つまり個別条件においてのみ、高 I O の人は低 I O の人よりも平等分配を行っていたということである。

また、貢献度の高い人（高貢献者）にとっては衡平分配を行った場合が、低貢献者にとっては平等分配を行った場合が“得な”分配となる。しかし、多くの研究報告から、高貢献者は平等分配を行いやすく、低貢献者は衡平分配を行いやすい傾向のあることが明らかにされている（奥田，1984）。しかし、このような“謙虚な分配”はどのような条件においても行われる訳ではない。分配行動に関する匿名性の保証の有無（または、個別的分配か公的分配かの問題）や将来の相互作用の予期といった対人的な条件が影響を及ぼすと考えられる。加えて、一般的な性差や年齢（発達）差の問題も考えられるであろう。このような条件と関連する個人差変数として、ここでは I O を取り上げた。

奥田（1985）は、被験者が謙虚な分配を行うのは、他者の期待に応えるためであり、それが正しい分配だと思っているとは限らないと述べている。このような観点から、斎藤（1985）は実験を行っている。I O との関係から次のような分配行動を予測した。I O の高い人は他者の期待に応えるために謙虚な分配を行うであろう。す

なわち高貢献者は平等分配を、低貢献者は衡平分配を行うと考えられる。また、I O の低い人は合理的分配を行うであろう。合理的分配とは、貢献度の高低にかかわらず衡平分配を行うことである。更に分配意見の決定理由からいえば、I O の高い人はその理由として他者の存在を重視するのに対して、I O 低い人は貢献度との関係を重視すると考えられた。

実験に先立って、127名の大学生（男性48名、女性79名）に対して I O S - V を実施した（平均67.6、標準偏差8.17）。全体尺度得点に基づいて、男女それぞれ20名が実験に参加した。実験は 2（I O の高低）× 2（貢献度の高低）の要因配置であり、各群に男女各 5 名ずつ無作為に割り当てられた。被験者は 4 人 1 組のジレンマ・ゲームに参加し、高貢献度が低貢献度になるように操作された（被験者にとって他の 3 人は、異なる貢献度 1 名と中貢献度 2 名であった）。ゲーム終了後、分配意見の交換が行われ（中貢献者は平等意見と衡平意見を表明しているように操作されていた）最後に分配意見の決定理由や他者に関する評定が行われた。

その結果、被験者自身の分配意見は、I O の高低にかかわらず、高貢献者が平等分配を、低貢献者が衡平分配を行う謙虚な分配がみられた。これは実験のセッティングの側面から再考されるべき問題を含んでいると考えられる。しかしながら I O の低い人は自分の貢献度を重視しており、貢献度が高い場合に平等分配意見を表明しつつそれに満足していない、すなわち謙虚な分配に対するネガティブな反応傾向の可能性が示された。また、I O の高い人は、他者の平等意見を好み、それを表明する他者に好意的であることも示唆された。この結果は部分的に当初の予測を支持するものといえる。

V. 全体的考察

本研究では、Rubin & Brown（1975）によって導出された他者の行動に対する関心と反応性に関する個人差である I O を測定する尺度が 5 つの段階を経て構成された。Swap & Rubin（1983）の翻訳版 I O 尺度を更に改良した I O S - V についての分析から得られた結果を要約すると次のようになる。第一に翻訳版 I O 尺度（I O S - II）に比べ、高い内的整合性が示され（ α 係数は全体尺度で .80、下位尺度で .65 から .77）信頼性の点では向上がみられたといえる。第二に、因子分析の結果“人間関係志向性”、“対人的関心・反応性”、“個人主義傾向”の 3 因子が抽出され、当初の概念定義に沿ったかたちでの尺度が構成されていると解釈された。第三に、他のパーソナリティ尺度との相関から検討された弁別性、妥当性の問題である。親和欲求尺度との高い相関

(全体尺度とは.65)がみられたが、下位尺度との関連性を考慮すれば、比較的高い弁別性をもった尺度ということができると考えられた。

また、IOS-Vを用いて行われた自己開示と対人魅力、報酬分配行動に関する実験の結果も、尺度の有効性を示唆していた。すなわちIOの高い被験者は自己開示を行う刺激人物にポジティブな反応を示していたのである。また、高IOの被験者は平等分配意見を表明する他者に好意的であり、低IOの被験者は自己の貢献度を重視していたのである。

これら一連の結果は、IO概念及びIOS-Vの有効性を支持するものといえよう。しかしながら、改善すべき問題点や今後検討されるべき問題も存在すると考えられる。そのひとつは、妥当性吟味の際にみられた親和欲求尺度との高い相関にかかわる問題である。IO概念は、Rubin & Brown (1975) にみられるように、広義の社会性にかかわるものであるといえよう。したがって、親和欲求とある程度の重複が生じることは十分に考えられることである。便宜的な解決策としては、先にも述べたように、狭義のIO概念と対応するものと考えられる“対人的関心・反応性”の下位尺度を用いることが考えられる。本研究で用いた親和欲求尺度がEPPSから借用したものであり、その信頼性、妥当性には問題があるといえるかもしれないが、こうした測定法の問題と同時に、やはり概念定義が最も基本的な問題といえる。この点に関しては後に更に言及することにする。

いまひとつの問題点は、有効性吟味のための実験に関してである。2つの実験から、IO概念の有効性を示唆するようなある程度の結果は得られている。しかしながら、用いられた実験パラダイムに関しては、それぞれ特有の問題点を持っていると考えられる。それらが解決されたとしても、依然として重要な問題が存在する。たとえば、自己開示研究から得られているMPIのN傾向や、セルフ・モニタリング傾向といった個人差変数とIO概念との関係、また報酬分配研究にみられる性差や年齢差などとIO概念との関係である。こうした個人差変数とIOとの関係を明らかにするためには、より詳細な行動のプロセス、メカニズムのなかでIOがどのように機能しているかを特定するような実験計画をたてる必要があるということである。

このような問題は“IOとは何か”という問いに帰結するのであろう。先に述べた親和欲求との問題とも関連している。たとえば、Hill (1987) は、親和動機を測定する尺度としてIOSと名付けたものを提案しているが、そこでは、社会的比較、情動的支援、肯定的刺激、

注意といった4つの下位尺度を設定している。このように“親和動機”、“対人的志向性”といっても研究者によって、その概念定義は若干異なっているのである。また、対人的行動に関連する調整変数として、Snyder (1974) のセルフ・モニタリングの概念、Mehrabian (1972) の親和傾向、拒否敏感性、共感性傾向等の概念、Fenigstein, Scheier & Buss (1975) などの自己意識といった概念との関連性からも、IO概念の明確な定義が必要となるであろう。

また、MO概念との関連性を検討するところから、IO概念の有用性を考えていくこともできると考えられる。たとえば、土肥・岩渕(1980)のモデルIIによれば、相手の認知は“相手の反応性(REA)処理”と“社会的動機の方向(OSM)処理”に影響を及ぼすことになる。ここでの相手の反応性の認知の個人差にかかわるのがIOと考えることができる。そして、対人的な反応はOSM処理に集約される。すなわちMOとの関連で行動が決定されるというのである。また、対人認知研究からみいだされているいくつかの次元(Kelley, 1983参照)はIOとMOに対応していると考えられる。このようにMO概念との関連性を考慮することによって、IO概念の適用範囲は広がるといえよう。これまでの知見を統合するという観点に立てば、IO概念の有用性は更に強調されることが考えられる。

文 献

- 安藤清志 1986 対人関係における自己開示の機能 東京女子大学紀要(論集), 36, 167-199.
- Archer, R. L., & Burleson, J. A. 1980 The effects of timing of self-disclosure on attraction and reciprocity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 120-130.
- Chaikin, A. L., & Derlega, V. J. 1974 Variables affecting the appropriateness of self-disclosure. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 588-593.
- Christie, R., & Geis, F. L. 1970 *Studies in machiavellianism*. New York: Academic Press.
- Deutsch, M. 1960 The effect of motivational orientation upon trust and suspicion. *Human Relations*, 13, 123-139.
- 土肥聡明・岩渕次郎 1980 ゲーム場面における行為選択の情報処理モデル 旭川医科大学紀要(一般教育) 2, 57-78.

- エドワーズ A. L. 肥田野直・岩原信九郎・杉村健・福原真知子(編訳) 1970 E P P S 性格検査用紙 日本文化科学社 (Edwards, A. L. 1953 *Edwards Personal Preference Schedule*. New York : The Psychological Corporation.)
- アイゼンク H. J. M P I 研究会(編訳) 1964 日本版モーズレイ性格検査手引 (Eysenck, H. J. 1959 *Manual of the Maudsley Personality Inventory*. London : University of London Press.)
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness : Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- 藤沢 苧・浜田哲郎 1961 F スケールによる人格の研究 I 教育・社会心理学研究, **2**, 35-46.
- Hill, C. A. 1987 Affiliation motivation : People who need people... but different ways. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1008-1018.
- 岩淵千明・田中国夫・中里浩明 1982 セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究, **53**, 54-57.
- 川名好裕 1985 対人的動機の数学的モデル 対人行動学研究, **4**, 1-8.
- Kelley, H. H. 1983 The situational origins of human tendencies : A further reason for the formal analysis of structures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **9**, 8-30.
- Kelley, H. H., & Thibaut, J. W. 1978 *Interpersonal relations : A theory of interdependence*. New York : John Wiley & Sons.
- Major, B., & Adams, J. B. 1983 Role of gender, interpersonal orientation, and self-presentation in distributive-justice behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 589-608.
- Mehrabian, A. 1972 *Nonverbal Communication*. New York : Aldine.
- 中村陽吉 1976 援助行動の研究—Sawyerの愛他心尺度の検討— 東京都立大学人文学報(心理学) **17**, 11-22.
- 中村陽吉 1983 対人場面の心理 東京大学出版会
- 中村雅彦 1984 自己開示の対人魅力に及ぼす効果 心理学研究, **55**, 131-137.
- 中村雅彦 1985 a 自己開示の対人魅力に及ぼす効果(4)—評価者の対人的志向性に関する検討— 対人行動学研究, **4**, 12-18.
- 中村雅彦 1985 b 対人魅力の規定因としての自己開示 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **32**, 201-213.
- 奥田秀宇 1984 報酬分配における自己呈示行動 水原泰介・辻村 明(編) コミュニケーションの社会心理学 東京大学出版会 Pp.43-58.
- 奥田秀宇 1985 報酬分配における利己主義と対人魅力 心理学研究, **56**, 153-159.
- Rubin, J. Z., & Brown, B. R. 1975 *The social psychology of bargaining and negotiation*. New York : Academic Press.
- 斎藤和志・中村雅彦 1985 対人的志向性尺度に関する研究(1)—対人的志向性がゲーム行動に及ぼす効果— 日本グループ・ダイナミックス学会第33回大会研究発表論文集, 89-90.
- 斎藤和志 1985 対人的志向性がゲーム行動に及ぼす効果(2) 日本心理学会第49回大会発表論文集, 730.
- 斎藤和志 1986 報酬分配場面における対人的志向性の効果 日本社会心理学会第27回・日本グループ・ダイナミックス学会第34回合同大会論文集, 237-238.
- Sawyer, J. 1966 The altruism scale : A measure of co-operative, individualistic, and competitive interpersonal orientation. *American Journal of Sociology*, **71**, 407-416.
- Snyder, M. 1974 The self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 526-537.
- Swap, W. C., & Rubin, J. Z. 1983 Measurement of interpersonal orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 208-219.
- 寺岡 隆 1979 囚人のジレンマ—規範的要求系モデルに基づく構造— Hokkaido Behavioral Science Report, Series P, Supplement No 11.
- Wyer, R. S. 1969 Prediction of behavior in two-person games. *Journal of Personality and Social Psychology*, **13**, 222-238.

(1987年7月31日 受稿)

ABSTRACT**AN ATTEMPT TO CONSTRUCT THE INTERPERSONAL ORIENTATION SCALE**

Kazushi SAITO and Masahiko NAKAMURA

This study attempted to construct the Interpersonal Orientation Scale (ISO) based on the concept proposed by Rubin & Brown (1975). High IOs are interested in and reactive to other people, whereas low IOs are less interested and responsive to others and more concerned with economic features of interpersonal relationships. The scale for Japanese based on Swap & Rubin (1983) was revised to the new scale (ISO-V) which was constructed by eighteen items. Factor analysis of ISO-V yielded three factors: *human relation directedness*, *interpersonal interest and reactivity*, and *individualistic tendency*. This scale had reasonable internal consistency. Correlations between ISO-V and other personality scales indicated expected relations. Then, the validity of IO construct and the usefulness of ISO-V were examined by two experiments. First experiment was aimed to examine the influences of evaluator's IO on attraction toward the self-disclosing other. By this experiment, it was found that high IOs showed greater responsiveness to variations in other's disclosures than did low IOs. Second experiment aimed at exploring the effects of subjects' IO on their opinions about reward allocation and cognition of it. This experiment indicated that high IO individuals liked equality and low IOs took a serious view of own contribution. These results suggested that this scale was useful in understanding behavior in certain social situations.